復刻

映画春秋

映画春秋社／編集（＝「キネマ旬報」同人）
第 1 号〜第 34 号（1946 年 8 月 1 日発行〜 1950 年 4 月 10 日発行）まで
キネマ旬報から派生した映画論壇誌。

★ 総合監修：谷川建司　発売元：文生書院

第 5 回配本（全 3 冊）	1 〜 5 号	1946 年 8 月 15 日〜 1947 年 3 月 15 日	計 430 頁	￥46,200（￥42,000 税別） ISBN 978-4-89253-646-5
	6 〜 11 号	1947 年 4 月 15 日〜 1948 年 2 月 10 日	計 490 頁	
	12 〜 18 号	1948 年 3 月 10 日〜 1948 年 9 月 10 日	計 476 頁	
第 6 回配本（全 3 冊）刊行予定	19 〜 25 号	1948 年 10 月 10 日〜 1949 年 7 月 10 日	計 548 頁	￥51,150（￥46,500 税別） ISBN978-4-89253-647-2
	26 〜 30 号	1949 年 7 月 10 日〜 1949 年 12 月 10 日	計 512 頁	
	31 〜 34 号	1950 年 1 月 10 日〜 1950 年 4 月 10 日	計 476 頁	

文生書院　〒 113 - 0033　東京都文京区本郷 6 - 14 - 7
電話 03 - 3811 - 1683　Fax 03 - 3811 - 0296　E-mail : info@bunsei.co.jp

『映画春秋』解説

谷川建司（たにかわたけし）（早稲田大学）

昭和21年（1946年）3月に『キネマ旬報』再建号の刊行をスタートさせた友田純一郎ら同人が、本家の『キネマ旬報』よりももっと芸術としての映画にフォーカスした形での別働隊として同年八月にスタートさせた雑誌で、発行所は映画春秋社となっているが、実際には編集部が置かれたのは、当時、『キネマ旬報』編集部があった京橋区新富町（現、中央区新富町）2丁目の同じ住所である。

編集を任されたのは北川冬彦、飯島正（ともに監修としてクレジットされている）で、創刊号にはほかに編集委員として村上忠久、滋野辰彦、林勝俊、則武亀三郎、旗一兵、早田秀敏、時実象平、松村武夫の名が記されている。北川に託されたのは彼が戦前に詩雑誌『詩と評論』を手掛けた経験があり、文学方面の人脈との交流があったためだろうと思われるが、創刊号の巻頭言で「失はれた映画芸術の復興、映画芸術精神の新たなる喚起」こそがこの雑誌の使命と謳っているものの、刊行が当初予定よりも1ヶ月ほど遅れ、その間の6月に京都で清水光が『映画芸術』を創刊していたため、誌名は『映画春秋』ということになった。

判型はB4サイズの『キネマ旬報』本誌よりも一回り小さなA5サイズで、値段は本誌が6円なのに対して5円とされた（その後はインフレに伴って、本誌ともども段階的に値上げし、最終的には本誌90円に対し70円とされた）。内容面での特徴はやはり文学者など、文化人らに積極的にアプローチして健筆を揮わせている点だろう。邦画・洋画ともに俎上に載せているものの、どちらかというと洋画に範を取り、邦画界のレベルを底上げさせようという立場で、飯島正や植草甚一、双葉十三郎、清水千代太らの洋画についての論考もあるものの、印象としては邦画寄りの編集である。

創刊号には、病床にあった（そしてこの創刊号の翌月に46歳の若さで病死する）伊丹万作の有名な「戦争責任者の問題」という論考が掲載されているほか、新藤兼人の『待帆荘』（『持ちぼうけの女』の元となったシナリオ）が掲載され、以後、第5号からは毎号1、2編のシナリオが掲載されるのが恒例化した。取り分け、黒澤明、木下恵介、谷口千吉、新藤兼人といった30歳代の若手映画人たちへの期待が大きかったようで、彼らのシナリオを度々掲載しているのみならず、寄稿も依頼している。

具体的には、黒澤は第11号（1948年2月）に『肖像』、第13号（1948年4月）・第20号（1948年12月）・4巻4号（昭和24年5月・通巻24号）にそれぞれ『ジヤコ萬と鉄』、『罪なき罰』、『暁の脱走』（いずれも谷口千吉と共同）、第28号（昭和24年9月＝創作シナリオ特集）・第34号（昭和25年4月）にそれぞれ『野良犬』、『醜聞（スキャンダル）』（どちらも菊島隆三と共同）のシナリオが掲載されているのに加えて、第2号（1946年9月）に「近頃考へた事」というエッセイを載せ、また第13号（1948年4月）ではグラビアで「『酔いどれ天使』の演出ノートから」を紹介している。

谷口千吉は上記のシナリオのほかに、第8号（1947年9月）に『銀嶺の果て』のロケハン日誌「銀嶺に挑む撮影」を載せている。

一方、木下恵介は第12号（1948年3月）に『女』、第29号（昭和24年10月）に『破れ太鼓』（小林

正樹と共同）のシナリオが掲載されている（『女』では木下自身が挿絵も手掛けている）ほか、第30号（昭和24年11・12月合併号）にはエッセイ「『現代のヒロイン』を推す」を載せ、また東宝争議の影響で阿部豊監督から引き継ぐ形となった監督作品『破戒』について、第18号（1948年9月）で久板(ひさいた)栄二郎によるシナリオと、久板自身による「あとがき」（製作が松竹に変更になった経緯の説明）、そして4巻2号（昭和24年2月号・通巻22号）では北川冬彦による「久板栄二郎論」と共に津村秀夫による「木下恵介の“破戒”」が掲載されるなど、寄せられている期待の大きさを物語っている。

新藤兼人は『待帆荘』以降も、第19号（1948年10月）に『嫉妬』、4巻1号（昭和24年1月・通巻21号）に『森の石松』、4巻2号（昭和24年2月・通巻22号）に『お嬢さん乾杯』、第28号（昭和24年9月＝創作シナリオ特集）に『真昼の円舞曲』、第32号（昭和25年2月）に『危険な年齢』、第33（昭和25年3月）に『肉体の正装』の計7本が掲載されているが、これは黒澤明と並んで、第34号まで続いた『映画春秋』で掲載された計36本のシナリオのうちの最多掲載本数である。

文学者としては、志賀直哉が第6号（1947年4月）で小津安二郎と「映画と文学」という対談を行ない、さらに第11号（1948年2月）でも随筆「失はれた週末」を寄稿しているのに加え、第9号（1947年11月）には瀧口修造による「その後の、そして最近の前衛映画」と題した論考が載り、第14号（1948年5月）では丹羽文雄が猪熊弦一郎、五所平之助と共に座談会「映画の日常性」に登場、昭和24年6月号（4巻5号）には三島由紀夫がエッセイ「好きな女優」（フランソワーズ・ロゼー、パトリシア・ロック、ジンジャー・ロジャーズらを挙げている）を、第30号（昭和24年11・12月合併号）には石坂洋次郎が「『女の顔』の映画化」を寄稿しているのが目につく。

三島由紀夫に関して補足するならば、映画通で映画に関する言説も多いことで知られる彼が実際に映画についてのエッセイや批評を多く発表するようになるのは昭和25年（1950年）以降のことである。「好きな女優」を書いたのはまだ出世作『仮面の告白』出版（1949年7月発売）の前のことで、林芙美子宛公開書簡の中で『悪魔が夜来る』（1942年／日本公開1948年7月）にひとこと言及したことがあっただけで、ほぼ初の映画エッセイだといってよい。この一事を考えただけでも編集部の目の付けどころの確かさを雄弁に物語っているといえよう。

こうして、順調に「失はれた映画芸術の復興、映画芸術精神の新たなる喚起」というその役割を果たしていた『映画春秋』だが、同じ編集部内で発行していた『キネマ旬報』再建号本体が、昭和25年（1950年）4月1日発行の第79号をもって、二つの組合の間で発行権を巡る争いが起きたことと、中心メンバーだった水町青磁が事故死したことによって幕を閉じるのと期を一にして、昭和25年4月10日発行の第34号をもって終刊となったのである。

【復刻版】占領期を中心とした『キネマ旬報』後継誌

既刊『キネマ旬報　再建号』（キネマ旬報社）

第 1 号～第 79 号（1946 年 3 月 1 日発行～ 1950 年 4 月 1 日発行）まで
キネマ旬報社内の集合離散のため、戦後刊行の『キネマ旬報』の号数にカウントされていない幻の号。

第 1 回配本（全 3 冊）	1 ～ 10 号	1946 年 3 月 1 日～ 1947 年 2 月 10 日	計 476 頁	￥51,150（￥46,500 税別） ISBN978-4-89253-626-7
	11 ～ 24 号	1947 年 3 月 1 日～ 1947 年 12 月 1 日	計 538 頁	
	25 ～ 36 号	1948 年 1 月 1 日～ 1948 年 6 月 15 日	計 536 頁	
第 2 回配本（全 4 冊）	37 ～ 48 号	1948 年 7 月 1 日～ 1948 年 12 月 15 日	計 624 頁	￥76,450（￥69,500 税別） ISBN978-4-89253-627-4
	49 ～ 60 号	1949 年 1 月 1 日～ 1949 年 6 月 15 日	計 562 頁	
	61 ～ 72 号	1949 年 7 月 1 日～ 1949 年 12 月 15 日	計 618 頁	
	73 ～ 79 号	1950 年 1 月 1 日～ 1950 年 4 月 1 日	計 520 頁	

『アメリカ映画』（アメリカ映画研究所／編集＝「キネマ旬報」同人）

第 1 号～第 21 号（1946 年 11 月 1 日発行～ 1948 年 10 月発行）まで
アメリカ占領政策に沿って発行された。

第 3 回配本（全 2 冊）	1 ～ 11 号	1946 年 11 月 1 日～ 1948 年 1 月 20 日	計 459 頁	￥35,200（￥32,000 税別） ISBN978-4-89253-653-9
	11 ～ 21 号	1948 年 2 月 20 日～ 1948 年 11 月 20 日（終刊）	計 440 頁	

既刊『映画新報』（映画新報社）

第 1 号～第 25 号（1950 年 8 月 1 日発行～ 1952 年 3 月 15 日発行）まで
田中三郎が発行編集人として刊行。

第 4 回配本（全 2 冊）	1 ～ 10 号	1950 年 8 月 1 日～ 1951 年 3 月 1 日	計 574 頁	￥42,350（￥38,500 税別） ISBN978-4-89253-640-9
	11 ～ 25 号	1951 年 4 月 1 日～ 1952 年 3 月 15 日	計 518 頁	

★原本の状態等で、価格が変更になる可能性があります。

Bunsei Shoin Booksellers,Co.,Ltd.
14-7 6 chome, Hongo, Bunkyo-ku Tokyo JAPAN 113-0033
Tel.: +81-3-3811-1683 Fax: +81-3-3811-0296
http://www.bunsei.co.jp e-mail: info@bunsei.co.jp